英語青年

THE RISING GENERATION

第152巻 / 第5号 (総号1890号)

平成18年8月1日発行　明治31年4月創刊

目　次

特集　村上春樹のアメリカ

「アメリカ」から遠く離れて——「九・一一」以降と村上春樹の文学 ……川村　湊 258

日本人の魂を求めて——村上春樹作品にみる日本とアメリカ ……宮脇　俊文 262

作家＝翻訳家村上春樹の出発——1979–1982 ……井上　健 266

"Beyond Category"——ジャズ、戦後日本、そして村上春樹 ……マイク・モラスキー 269

第2特集　ミュリエル・スパーク

アイデンティティの追求 ……大社　淑子 272

fucking と shit ……若島　正 274

悪魔のような女、ミュリエル・スパーク ……木村　政則 276

スパーク的ヒロイン、あるいはポストモダン的主体——自己創造としての軽やかな変身 ……沢田知香子 279

● 連　載

〈訳注式〉英語詩演習 (53): Edward Thomas, "Bob's Lane"——名の由来 ……吉川　朗子 282

医学と英文学 (5)——疫病の文学 ……鈴木　晃仁 289

英語・英文学・英語学教育を考える (5)——英語史をどう教えるか　今を感じる力 ……家入　葉子 292

英文法研究: 理論と事実の接点を求めて (5)——方言から言語理論へ(上) ……村杉　恵子 295

辞典・事典の愉しみ (5)——CALL 教室での辞書使用 ……磐崎　弘貞 298

訳者と読むこの1冊——ウィリアム・エンプソン『曖昧の七つの型(上・下)』 ……岩崎　宗治 300

● 海外新潮

copyright と authorship ……玉井　史絵 284

戦争詩人とモダニスト ……出口　菜摘 284

Scott(ish) Empire? ……松井　優子 285

ボヘミアから「サブトピア」へ ……下楠　昌哉 286

アトミック・エイジのアダムとイヴ ……渡邉真理子 287

詩の創造のプロセス: H. D. Chronology ……喜多　文子 287

● Book Review

新刊書架

朱雀成子著『愛と性の政治学——シェイクスピアをジェンダーで読む』(森祐希子)——藤井佳子著『コールリッジと「他者」——詩に描かれた家族』(笹川浩)——森松健介著『テクストたちの交響詩——トマス・ハーディ　14の長編小説』(福岡忠雄)——河村民部著『「岬」の比較文学——近代イギリス文学と近代日本文学の自然描写をめぐって』(荻野昌利)——柴田元幸著『翻訳教室』(八木敏雄) …… 302

英文解釈練習 ……大熊　榮 307

和文英訳練習 ……成瀬　武史 309

CORNERS …… 288

EIGO CLUB …… 312

片々録 …… 314

表紙について: セントアイヴズの画家たち (5) ……阿部公彦 302

Patrick Heron, *Fourteen Discs: July 10 1963*, 152.4×213.4cm, 油彩、キャンバス。The Heron family collection. © DACS, London & APG-Japan/JAA, Tokyo, 2006. 装丁: 広瀬亮平。

次号予告 …… 305

リレー連載第5回　英文法研究：理論と事実の接点を求めて

村杉　恵子

方言から言語理論へ（上）

1.「言語」と「方言」

言語の理論的研究は、経験的事実に関する記述に基づいているが、理論的な発展に貢献する経験的事実の多くは、英語やフランス語、日本語といった、いわゆる「言語」から引き出されるのが一般的である。しかし、Chomsky (1988) などによって詳しく論じられているように、言語研究の対象となる「言語」とは、(1b) に示すような、いわゆる社会的・政治的な共同体に共有される現象を指すのではなく、(1a) に示すように個人の心(脳)にあらわれる体系を指す。

（1）a.　個人の心・脳にあらわれる体系
　　b.　社会的な共同体に共有される現象

この立場に立つと、従来 (2b) のように考えられてきた「方言研究」はむしろ (2a) のように捉えられることになる。

（2）a.　個人の脳に内在する言語の原理と性質が、個人間でどのように異なり、どのような関連性をもつのかについての研究（非言語的データに基づく研究も含む）
　　b.　ある一定の地域・階層で使われている地域的・社会的な現象としての言語の総体を音韻、統語、語彙などの側面から行う研究

「言語」も「方言」も、あくまでも個人の脳に実在する言語知識を意味するのであるから、Chomsky (1988) が例にあげるように、例えば中国語で方言差とみなされるものが、ロマンス諸語と同じ程度に異なるという事実も納得できる。また、オランダの国境で話されているドイツ語の変種は、その付近に住むオランダ人には理解されるが、離れたところに住むドイツ人には理解されないという事実も当然のこととして理解される。このような見地に立つと、いわゆる「言語」と「方言」は、言語理論に対して、同じステイタスで貢献できることになる。

方言に関する記述的な研究は多く、フィールドワーク等によって膨大な方言記録が残され、分析が加えられている。しかし、その一方で、生成文法理論などの理論を基盤として方言を扱う研究や、方言データをもとに理論的仮説を実証する研究報告は、未だに多くはない。

本稿では、「方言」が、言語理論研究に対して重要な経験的事実を提供する研究事例を紹介する。今回は、補文標識の脱落現象について考えてみよう。

2.　補文標識の脱落：英語と日本語の相違

英語の事実として、補文標識の *that* が随意的にあらわれる現象があることはよく知られている。(3) がその例である。

（3）a.　John said (that) he saw Mary.
　　b.　the cookie (that) Mary ate

(3a) のように補文を導入する *that* や、(3b) のような関係節内の補文標識は、脱落することができる。

一方、補文標識の *that* が必ず顕在化しなくてはならない場合もある。(4) を見てみよう。[1)]

（4）a.　John said happily *(that) he saw Mary.
　　b.　the fact *(that) John is smart

(4a) に示すように、主節の動詞 (*said*) と補文標識 (*that*) の間に副詞が介在する場合（すなわち動詞と補文標識が隣接していない場合）や、(4b) に示すような pure complex NP（ギャップを含まない純粋複合名詞句）においては、補文標識 *that* は必ず音形をもってあらわれなくてはならない。

このような事実の背後にあるメカニズムを、幼児が親から後天的に学ぶとは考えにくい。もし補文標識の脱落の可否を決定する統語的メカニズムが、人間言語の特徴のひとつであるとすれば、多くの言語に、補文標識の脱落に関して類似した経験的事実が観察されることが予測される。

ところが、予測に反して、英語と同様のパラダイムは、東京方言の経験的事実においては観察されない。(3a) と (4a) について、(5) と (6) と比較

1)　* は当該の文が非文であることを示す。また *(. . .) とある場合には、括弧内の要素が随意的ではなく、義務的であることを意味する。

してみよう。

（5） 太郎は、花子に会った *(と)いった
（6） 太郎は、花子に会った *(と)幸せそうにいった

主節の動詞(「言った」)と補文標識(「と」)が隣接している(5)のような場合も、また(6)のように隣接していない場合にも、東京方言では補文標識(「と」)は顕在化されなくてはならない。これは英語とはまったく異なる経験的事実である。

また(3b)や(4b)のような現象も、東京方言にはまったく見られない。いずれの場合にも東京方言においては、補文標識はあらわれない。これも英語と異なる。

（7） a. 花子が食べたスパゲッティ
b. 太郎が聡明である事実

補文標識の顕在化について、いわゆる「標準的な」日英語を比較する限り、義務的な場合と随意的な場合とが交錯し、一見、英語は日本語とはまったく異なる、という結論しか導きだせないかのように見える。ところが、このような事実について理論的分析を行う上で、いわゆる「方言」が重要な役割を果たす。本稿では、日本語のいくつかの方言と英語との間に見られる驚くべき共通性を概観しつつ、それらの理論的意義について考える。

3. 文内の補文標識の脱落

Saito (1984) は、(3a) や (4a) のような補文標識のあらわれ方について英語と関西方言の比較から、興味深い共通性を見いだしている。まず英語における移動を示す例を見てみよう。

（8） a. John thinks (that) Mary is smart.
b. John knows (that) the teacher was lying.

(8a) や (8b) の文において、補文標識は随意的である。補文標識の有無に関わらず、文としては文法的であるのは、(3a) と同様である。

ところが、(9) に見られるように、補文が文頭に移動すると、*that* は随意的ではない。

（9） [*(That) the teacher was lying], John (already) knew [ ].

文頭に移動し、補部の位置にない補文においては、*that* は義務的なのである。この現象には、1980年代、Stowell (1981) により Empty Category Principle (空範疇原理) による説明が与えられている。

もし、このような現象が普遍的な原理により説明されるのであれば、日本語においても同様の現象が見られることが予測される。しかし、東京方言を見る限りにおいては、有効なデータは得られない。(10) の例を見てみよう。

(10) 東京方言
a. 太郎が[神戸に行く *(と)] 言った
b. [神戸に行く *(と)] 太郎が言った

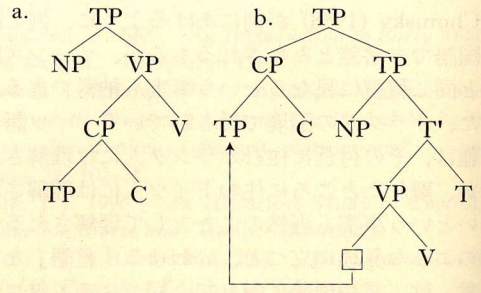
東京方言においては、補文が動詞の補部の位置にあっても、補文標識は義務的にあらわれなくてはならない。補文標識の随意性という現象が、そもそも観察されないのである。これは、(8) に見たパラダイムとは異なる。

ところが、関西方言を見ると、英語と同じパタンを観察することができると Saito (1984) は指摘する。

(11) 神戸方言
a. ジョンが神戸に行く(て)言うた
b. [神戸に行く *(て)] ジョンが言うた

関西方言においては、補文が動詞の補部の位置にあるときには、補文標識「て」は随意的である。すなわち、英語の例のように、補文標識はあってもなくてもよい。ところがこの「言語」において、補文が文頭にある場合には、補文標識が義務的になる。したがって補文標識のない「神戸に行く ジョンが言うた」というような例文は非文である。これは英語の例と同じパラダイムを示すものである。すなわち、日本語に、英語と同様の階層性があると仮定すると、以下のような構造が仮定される。

(12)



主語が文頭にある (12a) では、補文は動詞の補部の位置にある。しかし、(12b) が示すように、補文が主語に先行する場合には、補文は補部の位置から文頭に移動している。そして、(12a) のよう

な構造で補文標識が脱落でき、(12b) のような構造では補文標識が脱落できない。この関西方言の事実は、英語とパラレルであり、二つは同じ理論的説明を与えられる可能性があることを Saito (1984) は示している。

先に見た (3a) と (4a) の例についても、関西方言から類似するデータを得ることができる。英語と関西方言の双方において、補文標識の脱落の可否は、主文の動詞と補文が隣接しているか否かによるようである。(3a) の英語の例に対応する例が (13b) であり、(4a) の英語の例に対応する例が (14b) である。

(13) a. 太郎は、花子に会ったといった
　　 b. 太郎は、花子に会うた(て)ゆうた
(14) a. 太郎は、花子に会ったと幸せそうにいった
　　 b. 太郎は、花子に会うた *(て)幸せそうにゆうた

「幸せそうに」という副詞が埋め込み節内の動詞「会うた(会った)」と主節の動詞「ゆうた(言った)」との間に入るとき、補文標識(て)は脱落できない。ここにまた英語という「言語」と日本語の「方言」が、共通する統語的ふるまいを示すのである。

現在、英語における補文標識の顕在化については、主節の動詞と補文標識が隣接する場合のみに、補文標識は脱落できるとする一般化に基づいて研究が進められている。例えば Bošković and Lasnik (2003) は、英語の空補文標識は Pesetsky (1992) の言う PF affix であると考え、補文標識が空であらわれる現象は PF レベルでの隣接条件によって説明されるとする仮説を提案している。Saito (1984) に示された事実も、(3a) や (4a) に見る現象も、Bošković and Lasnik (2003) の仮説の予測するところと齟齬はない。日本語の関西方言の事実からも、補文標識が主文動詞に隣接しているときにのみ「脱落」現象が観察される。

以上の議論は、補文標識の脱落に関して二種類の「言語」があることを示唆する。一つは、東京方言のように、「補文標識の脱落が(PF 隣接条件を満たしていたとしても)絶対に許されない『言語』」である。そしてもう一つは「補文標識の脱落が(PF 隣接条件を満たしていれば)許される『言語』」である。前者の例は、「日本語の東京方言」であり、後者は、「英語と日本語の関西方言」であるといえる。ここに、いわゆる (1b) のような政治的な「言語」区分とは異なる言語の区分が見えてくる。「言語」と「方言」は、同じステイタスをもって理論的説明に貢献しうるのである。

4. 結 び に

本稿では、動詞の補部に見られる補文標識の脱落について概観した。しかし、(3b), (4b) そして (7) は異なるパタンを示しているようである。

英語の補文標識は、関係節の (3b) においては随意的に、一方 pure complex NP (純粋複合名詞句) の (4b) では義務的にあらわれる。

(3) b. the cookie (that) Mary ate
(4) b. the fact *(that) John is smart

ところが、日本語では、東京方言であろうと関西方言であろうと、どこの方言であっても補文標識はあらわれてはならない。

次回は、この名詞句内の補文標識のあらわれ方に関する日英語の差が、どのように分析されるのかについて検討しよう。この問題の解決についてもまた、方言研究が重要な鍵を与える。次回もまた、「方言」が、言語理論研究に対して重要な経験的事実を提供しうる研究事例を紹介する。

* 本稿は、筆者が 1997 年に東北大学文学部において講演し、その後南山大学紀要『アカデミア』(第 65 号) にまとめた論文の一部を含むものである。また本稿で扱う研究内容の一部は、南山大学 2006 年パッヘ研究奨励金 (I-A) (特別研究助成) の援助を受け、杉崎紘司氏、斎藤衛氏から貴重な示唆をいただいている。

参 考 文 献

Bošković, Ž and H. Lasnik (2003) "On the Distribution of Null Complementizers." *LI* 34.
Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding.* Dordrecht: Foris.
——. (1988) *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
Hale, K. (1983) "Warlpiri and the Grammar of Non-configurational Languages." *NLLT* 1.
Farmer, A. (1980) *On the Interaction of Morphology and Syntax.* Doctoral Dissertation, MIT.
Pesetsky, D. (1992) *Zero Syntax.* vol.2. Ms., MIT.
Saito, M. (1984) "On the Definition of C-command and Government." *NELS* 14.
——. (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications.* Doctoral Dissertation, MIT.
Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure.* Doctoral Dissertation, MIT.
村杉恵子 (1998) 『言語(獲得)理論と方言研究』「アカデミア」第 65 号。南山大学。

(南山大学教授)